

Ⅲ 出土遺物の報告

1. 瓦 類

本調査においては軒丸瓦87点、軒平瓦165点、鴟尾1点、鬼瓦5点、鳥衾1点、熨斗瓦1点、面戸瓦2点のほか、多量の丸・平瓦が出土した。時代は飛鳥時代から近世に及ぶ。ここでは飛鳥時代の溝SD6160・6191から出土した瓦類や今回はじめて出土した新型式の軒瓦などについて記述する。なお、軒瓦の内訳については巻末に一覧表を付した。

A SD6160・6191出土瓦類(第54図)

軒丸瓦2点、鴟尾1点のほかに整理平箱で約10箱分の丸・平瓦が出土している。

軒丸瓦3B(1)はいわゆる角端点珠形式の単弁9弁蓮華文軒丸瓦である。中房は突出し、蓮子1+6を配する。瓦当裏面は中高で、回転利用のナデを施す。丸瓦の接合位置は高く、接合粘土は内外とも少ない。硬質で灰色ないし青灰色を呈する。SD6160・6191から各1点出土。軒丸瓦3にはB・C種があり、弁の形状や蓮子の配置がわずかに異なる。昭和44年度の若草伽藍の調査では手彫り杏葉唐草文軒平瓦と組み合うことがわかっているが、今回の調査では出土していない。

鴟尾(2)は頂部に近い左側胴部の大きな破片である。胴部と鰭部に正段型を削り出し、胴部と鰭部の境及び背稜近くに断面台形の凸帯を削り出す。内面は鰭部まで全体をナデツケている。昨年度出土した飛鳥時代の鴟尾と同様に腹部は鰭部のかなり後方に取り付くと考えられる。また、背稜部は昭和14年の若草伽藍の調査で出土した鴟尾(第53図)のように背稜とその左右の凸帯計3条で構成されていたと考えられる。比較的硬質で灰色を呈する。厚さ1.4~2.0cmと薄手である。SD6191出土。

玉縁丸瓦(3)は数点出土している。飛鳥時代に特有な丸瓦で、凹面の布目は丸瓦本体にのみ認められ、玉縁部は丸瓦本体に別粘土を接合したのち、凹・凸面ともナデ調整する。

軟質で灰褐色ないし黒褐色を呈する。(3)は凹面に幅1.5~2.0cmの模骨痕と布目が残る丸瓦片である。行基丸瓦であろう。凸面は縦及び横方向にナデ調整し、側面と凹面の側縁を篋削りする。焼成前に釘孔を穿っている。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ1.8cm前後、後原径約17.5cm。

平瓦はいずれも桶巻き作りである。3種に大別できる。凸面を丁寧な縦ナデ調整するものである。凹面は一部に縦ナデを加えるが、側面は未調整で分割破面が残る。硬質で暗青灰色を呈するものと、やや軟質で淡灰褐色を呈するものがある。厚さ1.3~1.7cm。(5)は正格子叩き



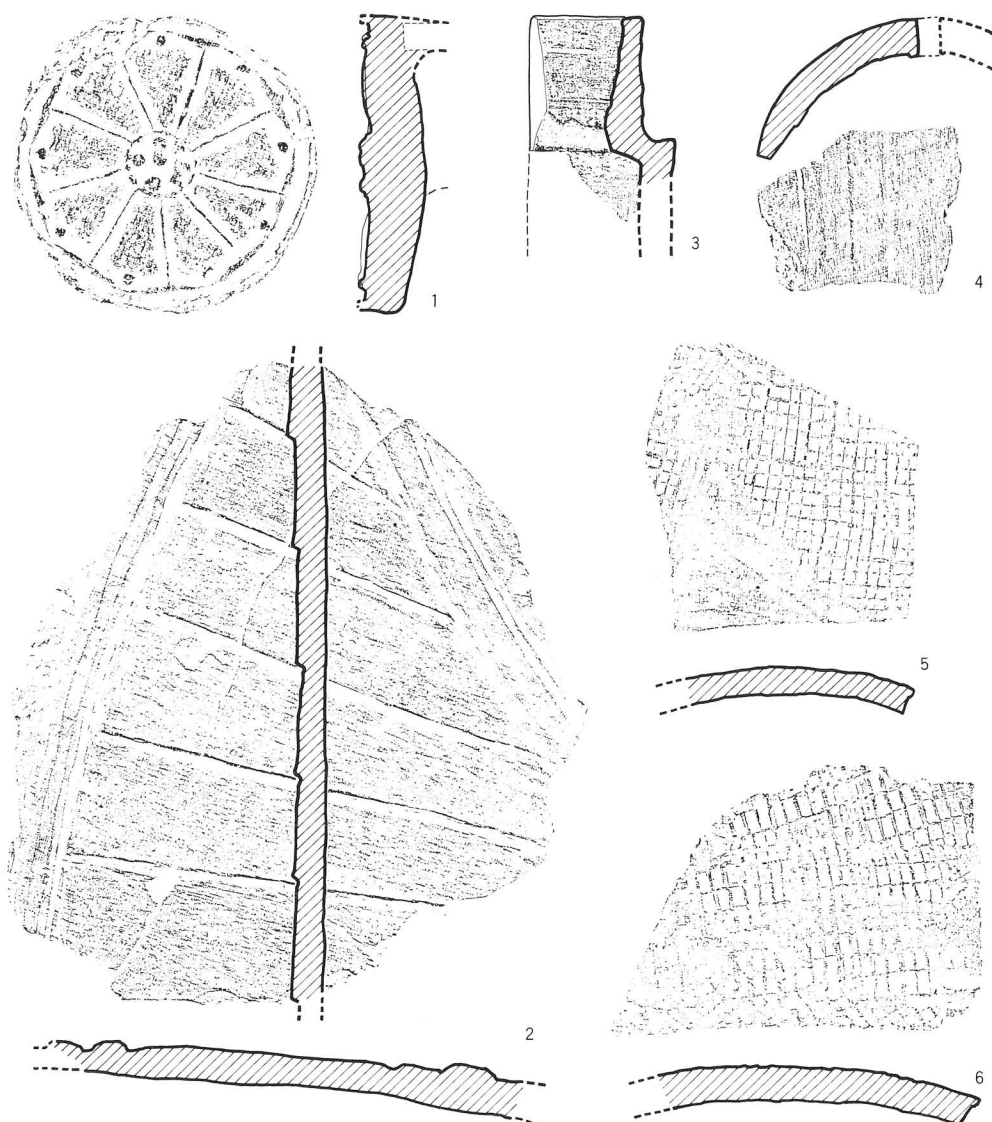
第53図 若草伽藍出土鴟尾

目平瓦である。格子は1辺が4～6mmの方形である(A種)。凹・凸面とも一部にナデを加える。側面は未調整で分割破面が残る、端面の凹面側は浅く面取りする。硬質で暗青灰色ないし暗灰褐色を呈する。厚さ1.2～1.8cm。(6)も正格子叩き目平瓦である。格子は5×10mmほどの長方形であるが、本報告の第一部でとりあげた正格子叩き目B種よりやや大きく(C種)。凹・凸面とも未調整。側面も未調整で分割破面を残すが、端面の凹面側は幅広く横に篋削りする。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約1.8cm。

註

1) 文化庁文化財保護部記念物課『法隆寺若草伽藍跡昭和44年度発掘調査概報』1969

2) 石田茂作『総説飛鳥時代寺院址の研究』1944



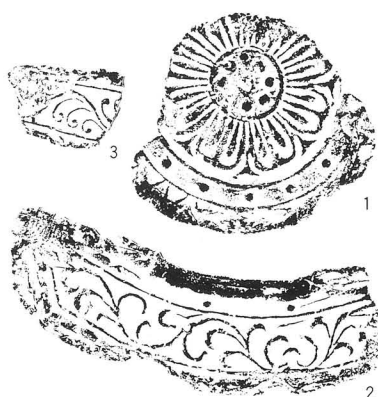
第54図 SD6160・6191出土瓦類(1:4)

B 新形式の軒瓦(第55図)

(1) は外区に珠文と線鋸歯文をめぐらせた複弁8弁蓮華文軒丸瓦54の新種でC種とした。A種は蓮子が1+4+8, B種は蓮子が1+4。C種は蓮子が1+8だが, B種より珠文が粗。奈良時代に比定できる。

(2) は外区に疎な珠文をめぐらせた3回反転の均正唐草文軒平瓦147Aである。従来, 中心飾が不明であったが, 本資料でそれが明らかになった。顎は直線に近い曲線顎である。平安時代に比定できる。

(3) は本報の第一部で新形式としてとりあげた軒平瓦と同種の圧端部破片。唐草第4単位の途中に脇区界線があり, 範の切り縮めと考える。曲線顎。平安時代に比定できる。



第55図 新形式の軒瓦(1:4)

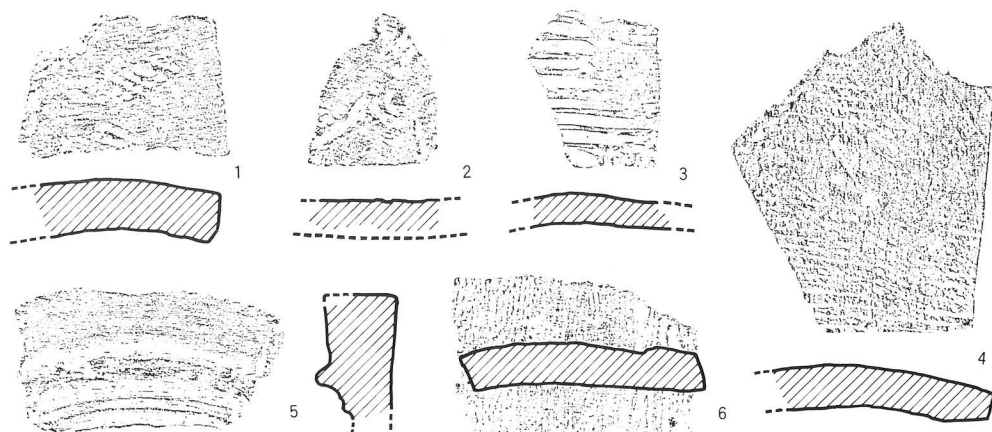
C その他(第56図)

飛鳥時代の平瓦4種と, 熨斗瓦及び特殊な瓦製品について紹介しておこう。

斜格子叩き目平瓦(1)は, 格子が4×5mm前後(A種)。凸面は一部横ナデ, 凹面は未調整。側面は篋削りする。硬質で暗青灰色を呈する。厚さ約2.6cm。凹面に青海波文のある平瓦(2)は硬質で, 凸面は剥離している。灰日色を呈する。凸面にカキ目のある平瓦のうち(3)は凹線の幅が5mm前後と広いA種。硬質で灰日色を呈する。厚さ約1.5cm。(4)は凹線の幅が2~3mmと狭いB種。カキ目は横及び斜め方向に施すが, わずかに斜格子叩き目が残る。側面と凹面の縁は篋削り。硬質で暗査灰色を呈する。厚さ約2.6cm。

特殊瓦製品(5)は一面に弧状の凸帯を設ける。重弧文鬼瓦かとも推測されるが明らかでない。やや軟質で灰白色を呈する。厚さ2.1~3.7cm。

割熨斗瓦(6)は凸面に縄叩き目, 凹面に荒い布目が残る。幅約12.5cm。平安時代か。



第56図 平瓦・熨斗瓦・特殊瓦製品(1:4)

2. 土 器 類

収納庫建設予定地の調査で出土した土器類は、調査区の南端と東端で検出した複数の自然流路SD6160・SD6191・SD6212・SD6214から出土した6世紀中頃～7世紀前半の土器、及びこれらの流路のベースとなる茶褐色粘土層出土の古墳時代土器と、調査区の南半で検出した2条の溝SD6124・6130から出土した中世～近世の土器・陶磁器類に分けられる。中～近世の土器・陶磁器類はこの2条の溝の他に、調査区各所で検出した土坑・溝から多量に出土しているが、整理未了であり、今回の報告では省略することにする。

A SD6160出土土器(第57図)

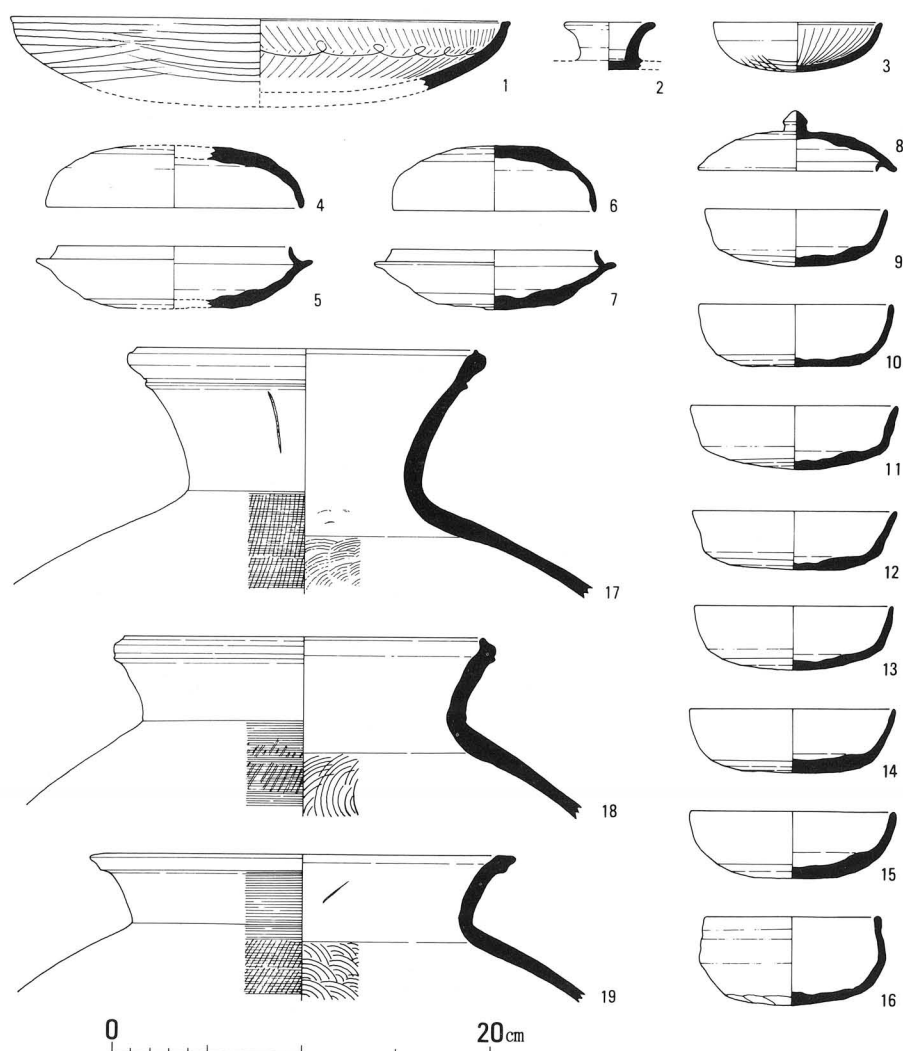
灰褐砂からなる流路SD6160の埋土からは多量の土師器・須恵器が出土した。時期的には7世紀前半のものが主体であり、一部6世紀末頃に遡るものを含んでいる。水流のためか、土師器はほとんどが小破片で接合するものも少ない。一方、須恵器は土師器に比べてその量も多く、杯類には完形に近い個体多数を含んでいる。

土師器には杯C、皿A、盤、蓋、甕類の破片がある。杯CⅢ(3)は口径8.8cm、器高2.7cm。底部外面をヘラミガキし、方射状暗文をもつ。盤(1)は口径26.4cm。底部外面ヘラケズリの後ヘラミガキで、内面には2段の方射状暗文とラセン暗文をもつ。環状のつまみをもつ蓋(2)はつまみのみの破片。上端の径4.8cm、高さ2.1cm。おそらく台付碗の蓋であろう。大阪府玉手山横穴の出土品に類品がある。

須恵器には杯G・杯H・碗・鉢A・平瓶・甕がある。杯H(5)は径14.6cm、口径12.2cm。杯H蓋(4)は口径13.3cm。底部外面、頂部外面はいずれもヘラケズリで仕上げる。杯H(7)は径12.8cm、口径10.8cmで、底部外面ヘラキリのまま。杯H蓋(6)は口径10.6cm。頂部外面ヘラケズリ。杯G(9)は口径9.4cm、器高3.0cm。底部外面ヘラケズリ。杯G蓋(8)は径10.6cm、口径8.4cm、器高3.3cm。頂部外面をヘラケズリして、宝珠形のつまみをつける。杯G(10～15)は杯G(9)に比べ一回り大きく、口径10.2～10.8cm(平均10.5)cm、器高3.1～3.5(平均3.3)cmの良くそろった法量をもつ。底部外面はいずれもヘラケズリ仕上げで、13・14の底部外面にはヘラ記号がある(第64図)。大阪府陶色古室跡群の製品をはじめとして、これまでに知られている7世紀前半の杯G・杯Hは、宝珠形のつまみを持つ杯G蓋を例外として、いずれも底部外面あるいは頂部外面のヘラケズリを省略するのが一般である。SD160出土の杯G(9～15)、あるいは杯H蓋(6)にみられるヘラケズリ仕上げの残存は、これらの製品を生産した在地窯が法隆寺近傍にあることを示すものかもしれない。碗(16)は口径9.2cm、器高4.7cm。底部外面は一方向にヘラケズリした後、右回りの周縁ケズリで調整する。甕(17～19)はそれぞれ口径17.8、19.0、20.6cm。口縁部の形態を異にするが、体部はいずれも叩き成形の後、カキ目で調整する。17の頸部外面、19の内面にヘラ記号がある。

B SD6191出土土器(第58・59図)

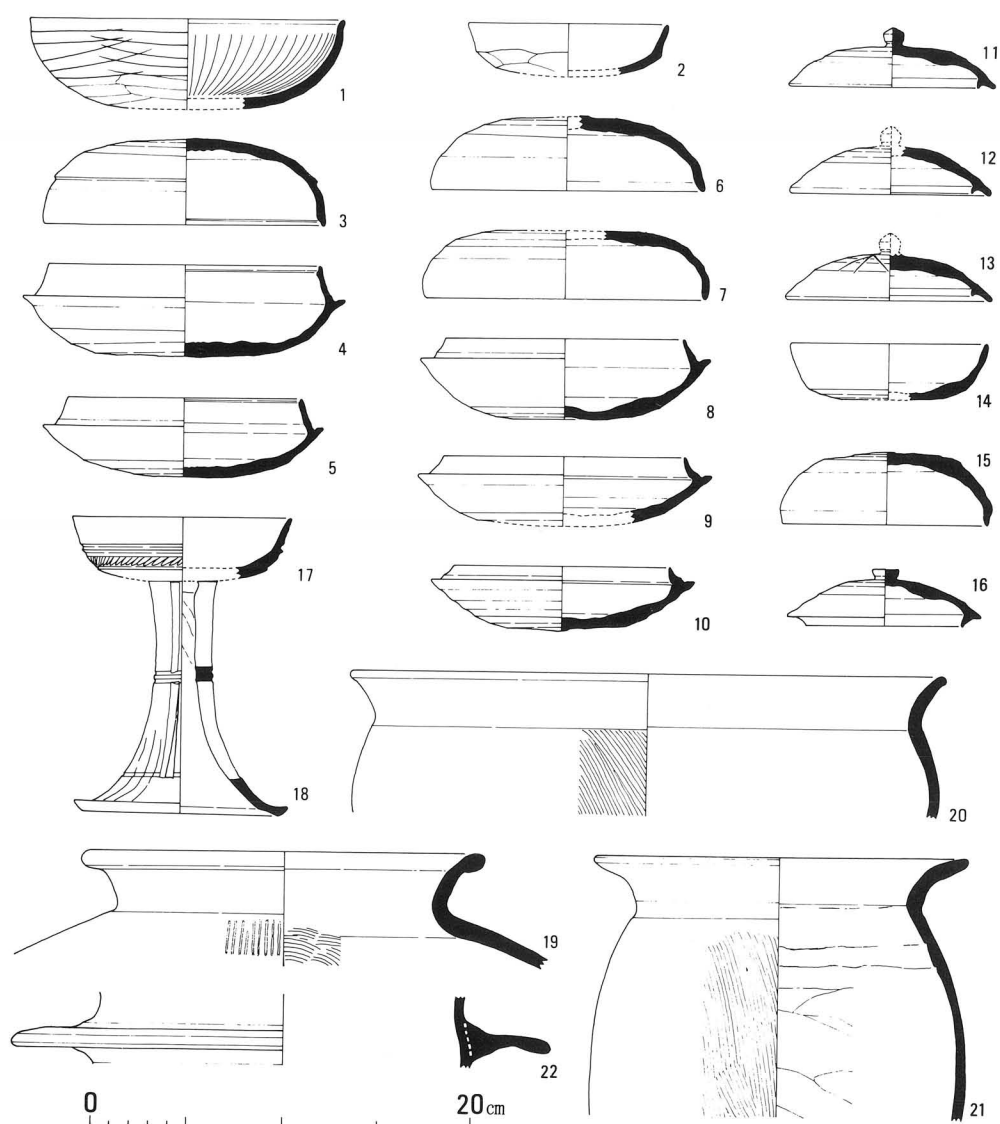
SD6191は調査区東端を南流する自然流路。埋土の堆積は上層から順に灰褐色砂(一部暗黄灰色粗砂)層、茶灰色バランス層、淡青灰色砂質土層であり、その下は流路のベースの茶褐色粘土層になる。2・5・6・13・15・16・18・20が上層の灰褐色砂・暗黄灰色粗砂層、1・3・4・10~12・14・17・19が中層の茶灰色バランス層、7・8・21・22が下層の淡青灰色砂質土層の出土である。上層・中層とも6世紀中頃~7世紀前半の土師器・須恵器が、混在して出土している。上層の灰褐色砂層から、SD160出土の須恵器甕(19)に直接接合する口縁部破片が出土しており、この2条の流路の埋没が同時期もしくはかなり接近した時期であったことが推測できる。また同じ上層の灰褐色砂層から、昭和57年度の第213トレンチの瓦敷き面SX4560で出土した獣脚円硯と同一個体とみられる硯の破片が出土



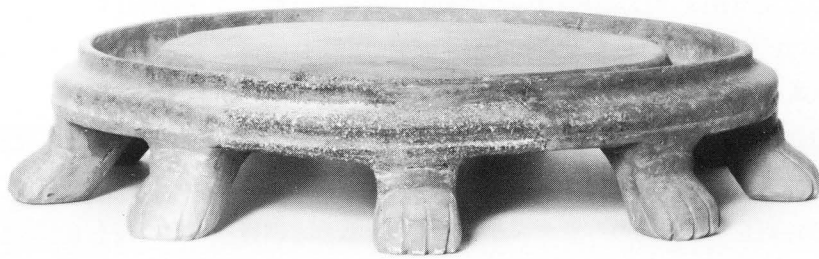
第57図 SD6160出土土器

した。SX4560はSD6191の南西100mに位置し、若草伽藍推定域の東端にあたる場所である。SD6191, 他の流路に投棄された土器・瓦類の出所について、一つの手がかりを与えるものであろう。

土師器には杯C・杯H・皿A・甕・羽釜がある。杯CI(1)は口径16.2cm。口縁部外面ヘラケズリで、口縁部外面とヘラミガキし、内面に方射状暗文をもつ。杯H(2)は口径10.3cm。底部外面を不定方向のヘラケズリで仕上げ、底部と口縁部の間に稜をもつ。甕(20)は口径31.0cm。体部外面ハケ目調整で、口縁部内外面をヨコナデし、端部は丸くおさめる。甕(21)は口径19.7cm。体部外面ハケ目調整、体部内面の中位以下をヘラケズリし、口縁部



第58図 SD6191出土土器



第59図 SX4560・SD6191出土獸脚円硯(1:3)

内外面をヨコナデして、端部を丸くおさめる。体部内面上端には成形時の粘土紐のツギ目を残す。羽釜（22）は口縁部・体部を欠く破片、黒色の雲母を多量に含む「生駒西麗の土器」である。

須恵器には杯G・杯H・蓋・高杯・甕がある。杯H（4）は径16.8cm，口径14.1cm，器高4.9cm。杯H（5）は径14.5cm，口径12.1cm，器高4.3cm。いずれも底部外面をヘラケズリし，内面中央に同心円文をもつ。杯H蓋（3）は口径14.6cm，器高4.5cm。頂部外面をヘラケズリし，内面に同心円文をもつ。杯H（8）は径15.2cm，口径12.4cm，器高4.1cm。杯H（9）は径15.4cm，口径12.6cm。杯H（10）は径13.8cm，口径11.2cm，器高3.4cm。いずれも底部外面はヘラケズリ仕上げ。杯H蓋（6・7）は口径14.2cm，器高3.9cmと口径14.6cm，器高3.6cm。頂部外面をヘラケズリし，口縁端部は丸くおさめる。杯G（14）は口径10.2cm，器高3.0cmで，底部外面はヘラケズリ仕上げ。杯G蓋（11）は径10.8cm，口径9.0cm，器高3.2cm。頂部外面をヘラケズリし，宝珠形のつまみをつける。杯G蓋（12・13）は径10.6cmと10.8cm。頂部外面ヘラケズリ。11・13の頂部外面にはヘラ記号がある（第65図）。杯H蓋（15）は口径10.6cm，器高3.9cm。頂部外面はヘラキリままの不調整。蓋（16）は径10.2cm，口径8.2cm，器高3.0cm。頂部外面ヘラケズリし，頂部の扁平なつまみをつける。直口壺の蓋か。高杯（17・18）は別個体。杯部（17）は口径11.3cm。口縁部下半のつまみ出し凸帯と段の間に櫛描き波状文をめぐらす。脚部（18）はいわゆる長脚2段3方透し形態。脚裾部の径11.1cm，脚高12.2cm。脚裾部外面にヘラ記号がある。甕（19）は口径20.2cm。体部叩き成形で，口縁部内外面をヨコナデし，端部は玉縁状に丸くおさめる。

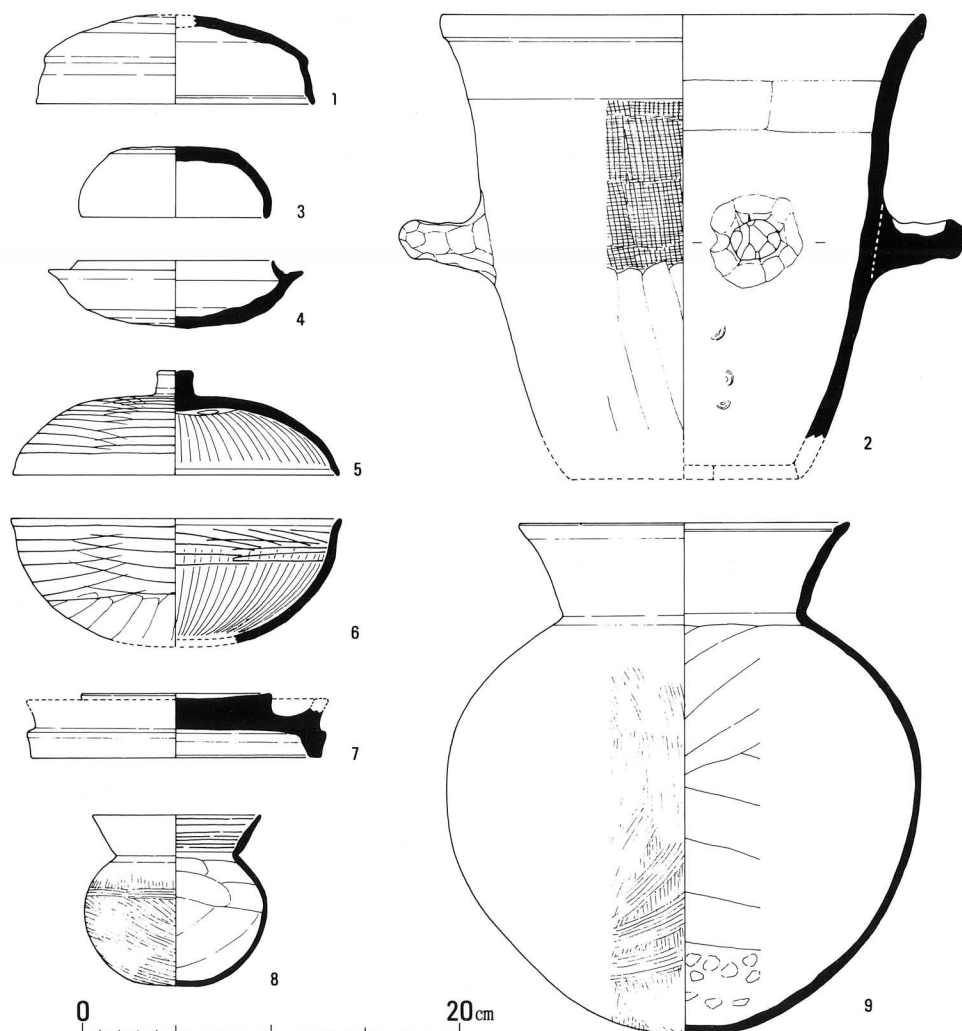
C SD6212出土土器（第60図1・2）

流路SD6212は調査区の東北端，SD6191に重複する位置にあり，その下層を東南に流れる自然流路。埋土の灰褐色バラス層から，6世紀中頃の土師器・須恵器が少量出土した。須恵器杯H蓋（1）は口径14.6cm，器高4.6cm。頂部外面ヘラケズリで，口縁端部内面に凹線を入れ，端部に内方へ傾斜する面をもつ。頂部と口縁部の間の屈曲部は，SD6191出土の杯H蓋（3）にみられるシャープなつまみ出し突帯ではなく，ヨコナデによる鈍い段に成形しており，頂部内面の同心円文もみられない。甕（2）は口径25.4cm。体部叩き成形で，

体部外面下半を縦位のヘラケズリで調整し、口縁部内外面をヨコナデして仕上げる。内面は成形時の当板痕（同心円文）をナデで消し、口縁部に接する部分を横位のヘラケズリで調整し、平滑な器面に仕上げている。把手は棒状の粘土を貼り付けて成形したもので、上面にヘラの切込みをもつ。

D SD6214出土土器(第60図3・4)

流路SD6214は調査区の東南隅、溝SD6124、及びSD6160の下層を東北―西南の方向に流れる自然流路。黒灰色砂質土、暗青灰色粘土の埋土から、土器師・須恵器が少量出土した。須恵器杯H(4)は径13.4cm、口径10.3cm、器高3.6cm。底部外面ヘラケズリ仕上げ。蓋(3)は口径9.7cm、器高3.7cm。頂部外面ヘラケズリ仕上げ。短頸壺の蓋か。



第60図 SD6212・6214等出土土器

E 包含層出土土器(第60図5～9)

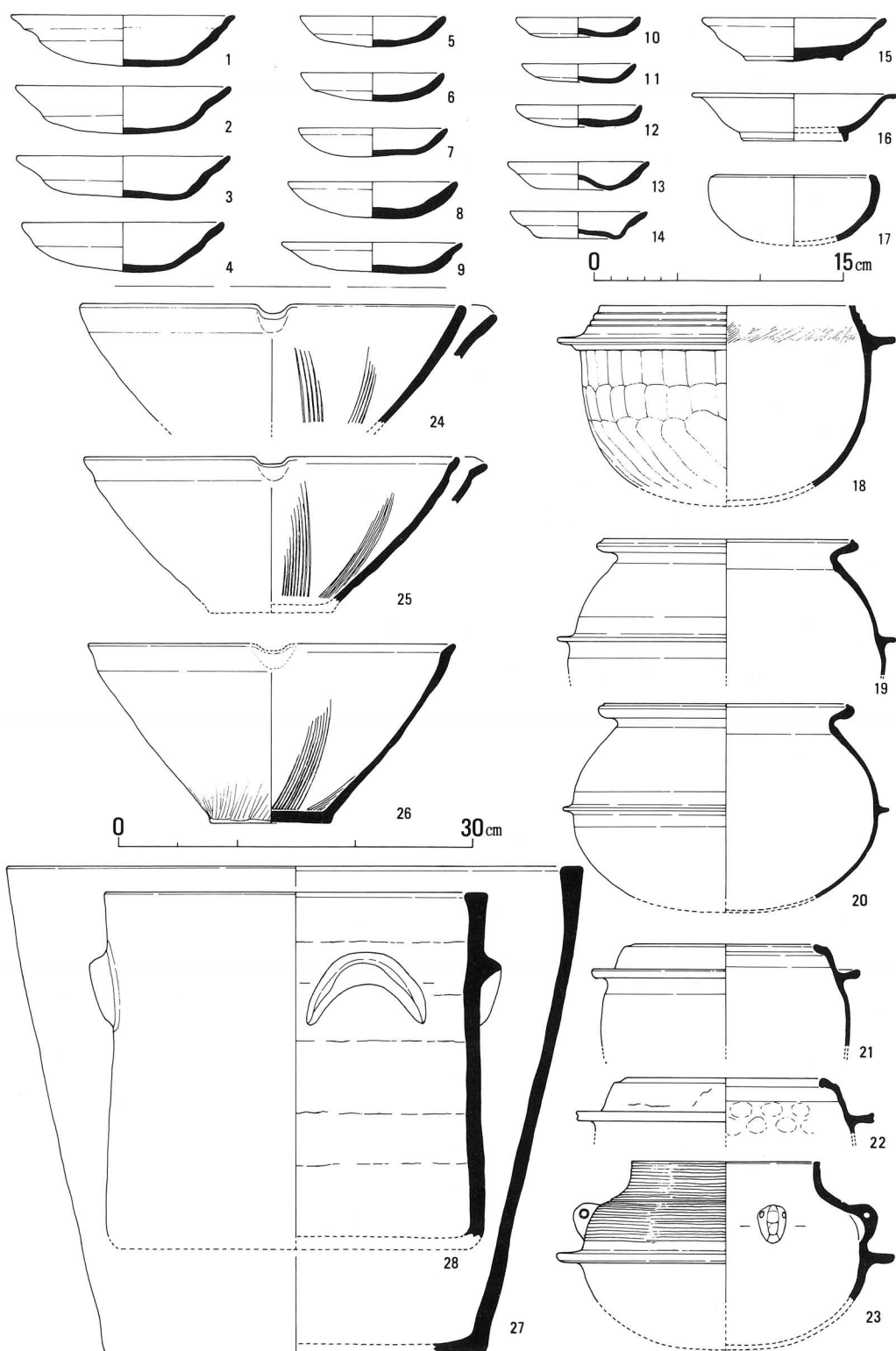
土師器蓋(5)、杯C(6)、須恵器円硯(7)は調査区の表土層及び暗茶褐砂質土層の出土品。蓋(5)は口径17.2cm、器高5.5cm。土師器杯Cを逆転し、頂部に径2.0cm、高さ1.4cmの円筒形のつまみをつけた形態である。頂部外面をヘラミガキし、内面にラセン暗文と方射状暗文をもつ。SD6160出土の蓋(2)と同じく、おそらく台付椀の蓋になるものであろう。杯CI(6)は口径17.2cm、底部外面一方向のヘラケズリで、口縁部内外面をヘラミガキし、内面に方射状暗文をもつ。円硯(7)は脚部の径15.8cm、陸部の径10.0cm、器高3.4cm。外堤上端を欠く。下面は陸部下面から脚裾部までロクロによらないヘラケズリで調整し、平滑に仕上げる。

土師器小形丸底壺(8)と大形の壺(9)はSD6160・6191、他の流路のベースとなっている茶褐色粘土層の出土品。壺(8)は口径8.8cm、器高9.0cm。体部外面ハチ目調整、内面ヘラケズリ調整で、口縁部内外面をヨコナデし、内面を横方向にヘラミガキする。壺(9)は口径17.4cm、体部径25.0cm、器高27.0cm。体部外面ハケ目調整、内面ヘラケズリ調整で口縁部内外面とヨコナデして仕上げる。口縁端部はわずかに内方へ肥厚し、端面は内方へ傾斜する。底部内面には成形時の指頭圧痕を残す。8・9ともに古墳時代前半の布留式土器の系統に連なるものであり、その新しい段階に属するものであろう。

F SD6130出土土器(第61図1～27)

溝SD6130は調査区の東南部で検出した溝。元来は東から西へ流れ、西端で南へ折れて溝SD6124の南北溝に注いでいた溝であるが、後にSD6124の直前でしがらみSX6136によって塞止められている。黒灰色粘質土の埋土から、多量の土師器・瓦質土器と陶磁器類の破片が出土した。

土師器には皿・椀・羽釜がある。大皿(1～4)は口径12.3～13.6(平均13.0)cm、器高2.7～3.1(平均2.9)cm。口縁部のヨコナデ調整は口縁部外面下端に及ぶ。1のみ2段ヨコナデ調整。1・4は灯火器として使用されている。中皿(5・6)は口径8.6cm、器高1.7～1.9cm。ヨコナデは口縁部外面下端に及ぶ。中皿(7～9)は口径9.0～11.0cm、器高1.8～2.2cm。ヨコナデ調整の範囲は口縁部外面上端までに限られる。中皿(5・6)との時期差、あるいは生産地の違いを示すものか。小皿(10～12)は口径6.9～7.6(平均7.4)cm、器高1.2～1.3(平均1.2)cm。ヨコナデは口縁部外面下端まで。中皿(13・14)は底部中央が上方へ突出する形態。口径8.2～8.6cm、器高1.6～1.8cm。口縁部のヨコナデ調整は口縁部外面中位まで。椀(17)は口径9.2cm。砂粒・雲母を含む粗い胎土の土器で、全面ナデ調整。他にほぼ同形態で、口径13.6cmの大形品がある。羽釜(19・20)は口径21.2cmと20.8cm。菅原正明の分類¹⁾による「大和B₁型」にあたる。器面は灰褐色で、器壁断面中央部は暗灰色～黒色を呈する。羽釜(21)は口径15.4cm。菅原の「大和H₃型」。羽釜(22)は口径16.4cm。「大和H₂型」にあたる。体部内面に成形時の円形当板痕を残す。型式別の出土個



第61図 SD6130(1~27)・SX6078(28)出土土器

個体数は大和B型20個体以上、大和H型2個体が確認できる。

註 1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』1983、同朋社)

瓦質土器には羽釜・茶釜・すり鉢・火鉢の他、用途不明の大型の深鉢の類がある。羽釜(18)は口径21.8cm。菅原の「河内D₁型」にあたる。胎土は茶褐色～暗褐色で、砂粒を含む。体部外面を横方向のヘラケズリで調整し、内面はナデ調整で仕上げるが、鍰の内側部分のみハケ目調整痕が残る。幅広の鍰から内傾して立ちあがる口縁部は、外面に3条の凹線をめぐらし、端部はヨコナデで水平に面取りしておさめる。茶釜(23)は口径16.0cm、鍰の径28.8cm。体部上半に、水平の円孔をあけた半球状の環付をつけ、頸部に凹線1条をめぐらせる。体部上半から頸部・口縁部の外面は丁寧なヘラミガキを施し、鉄製茶釜の写しにふさわしい光沢をもっている。すり鉢(24～26)は口径31.2～32.4cm、器高15.3cm。底部外面不調整で、口縁部内面と外面上端をヨコナデ調整し、底部から口縁部に向けて、5～9本の櫛目7単位前後からなる摺目をつける。すり鉢の破片はかなり多量にあり、図示した3例を含め14個体以上が確認できる。深鉢(27)は口径52.0cm、器高45.3cm、底径35.0cmのバケツ形の大形品。底部外面は砂底で、体部内外面はナデ調整。口縁部は水平に面取りし、ヨコナデ調整で仕上げる。

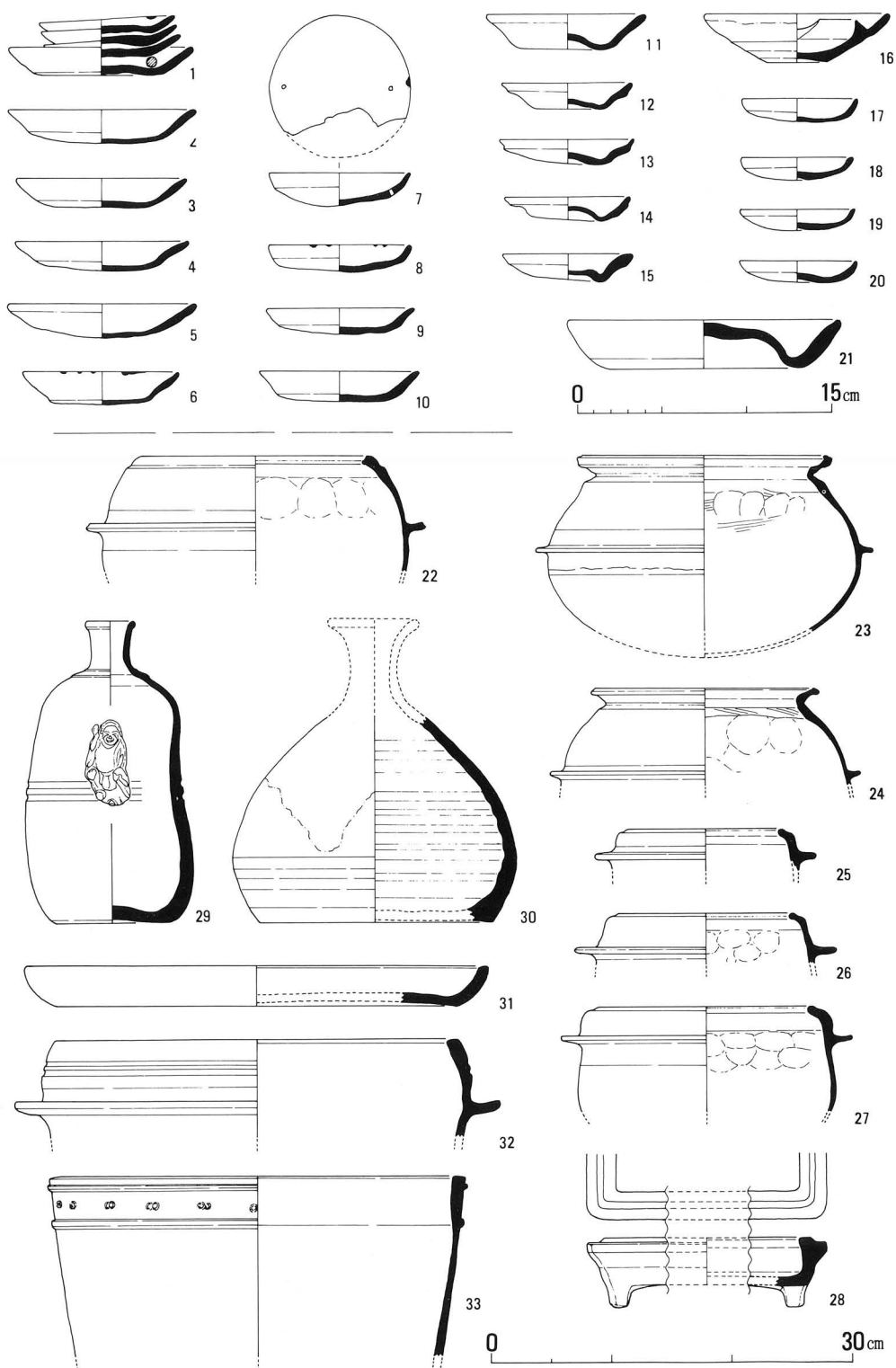
陶磁器類には信楽焼のすり鉢、備前焼の甕の体部破片、美濃(御深井)焼の皿、竜泉室系の蓮弁文青磁碗、白磁皿がある。美濃焼の皿(15)は口径11.2cm、器高2.6cm。内外全面に薄緑色・透明の灰釉をかける。白磁碗(16)は口径12.4cm、器高2.9cm。内外全面に白釉を施釉し、高台端部(畳付)は釉をヘラケズリでかき取り、露胎とする。

G SX6078出土土器(第61図28)

SX6078は調査区の西北部で検出した埋甕の施設。底部を打ち欠いた円筒形の瓦質土器を浅い掘形内に立てたものである。瓦質土器(28)は口径34.5cm、器高32cm前後の円筒形で、体部側面上半部に相対する2個の横耳状把手をもつ。体部内外面ともナデ調整で、内面には幅4～5cmの輪積み成形の痕跡を残す。口縁部は水平に面取りし、ヨコナデ調整で仕上げる。埋甕の施設はこのSX6078の他にも調査区の各所で多数検出しているが、それらに使用された容器はいずれもSD6130出土の瓦質土器深鉢(27)とほぼ同形態のものであり、円筒形で横耳把手をもつ形態はSX6078出土土器が唯一例である。

H SD6124出土土器(第62図)

溝SD6124は調査区の南半を東西に横断し、東溝で直角に南に折れ曲がり南流する溝。埋土の黒灰色粘質土から多量の土師器・瓦質土器と陶磁器類の破片が出土した。溝SD6130の出土品と比較すると、土師器皿類の形態・法量と、陶磁器類の内容に差がみられ、SD6124出土品により新しい要素が認められる。おそらく、しがらみSX6136によるSD6130の閉塞後も、SD6124がかなり長期にわたって溝としての機能を果していたことを示すものであろう。

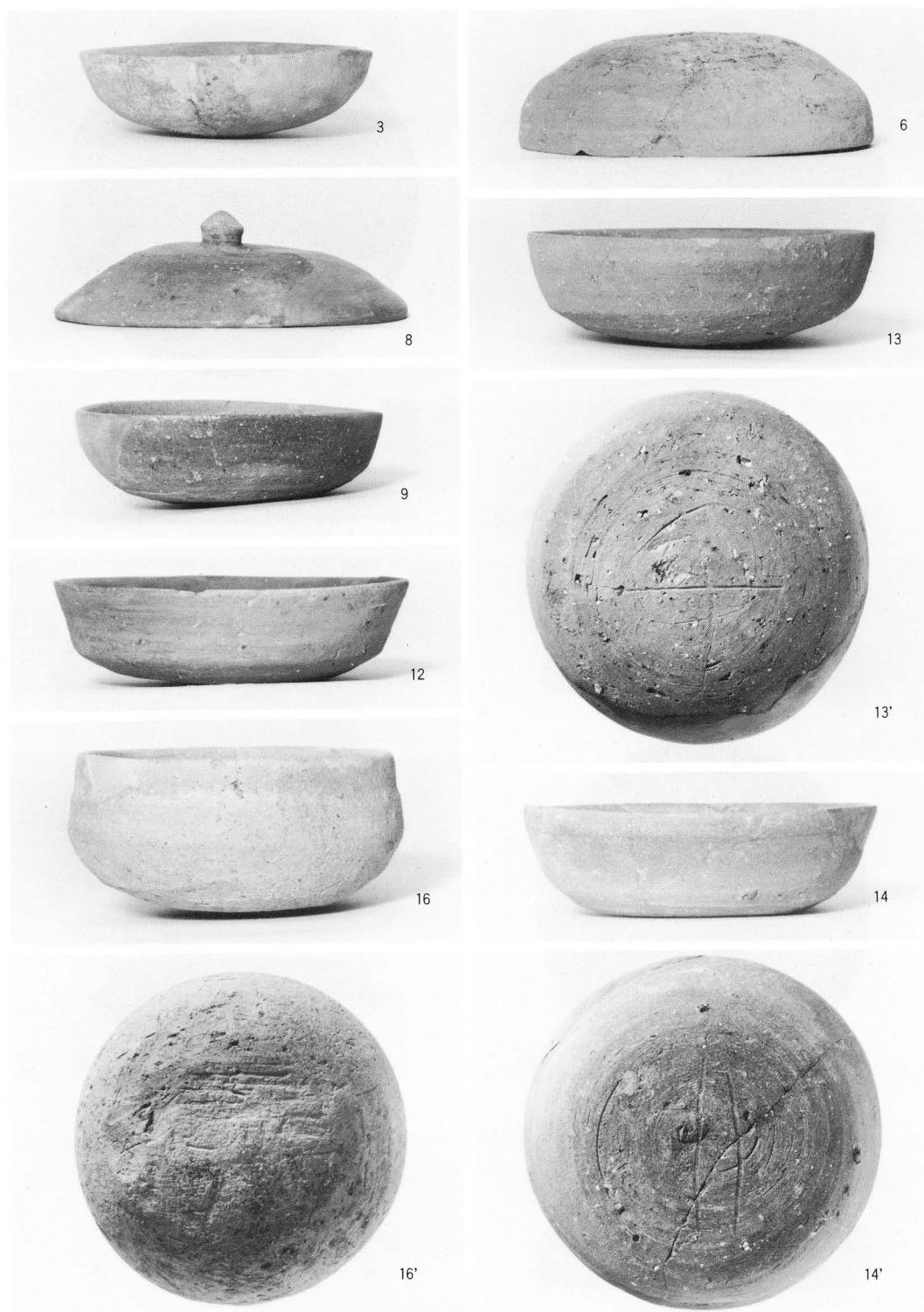


第62図 SD6124出土土器

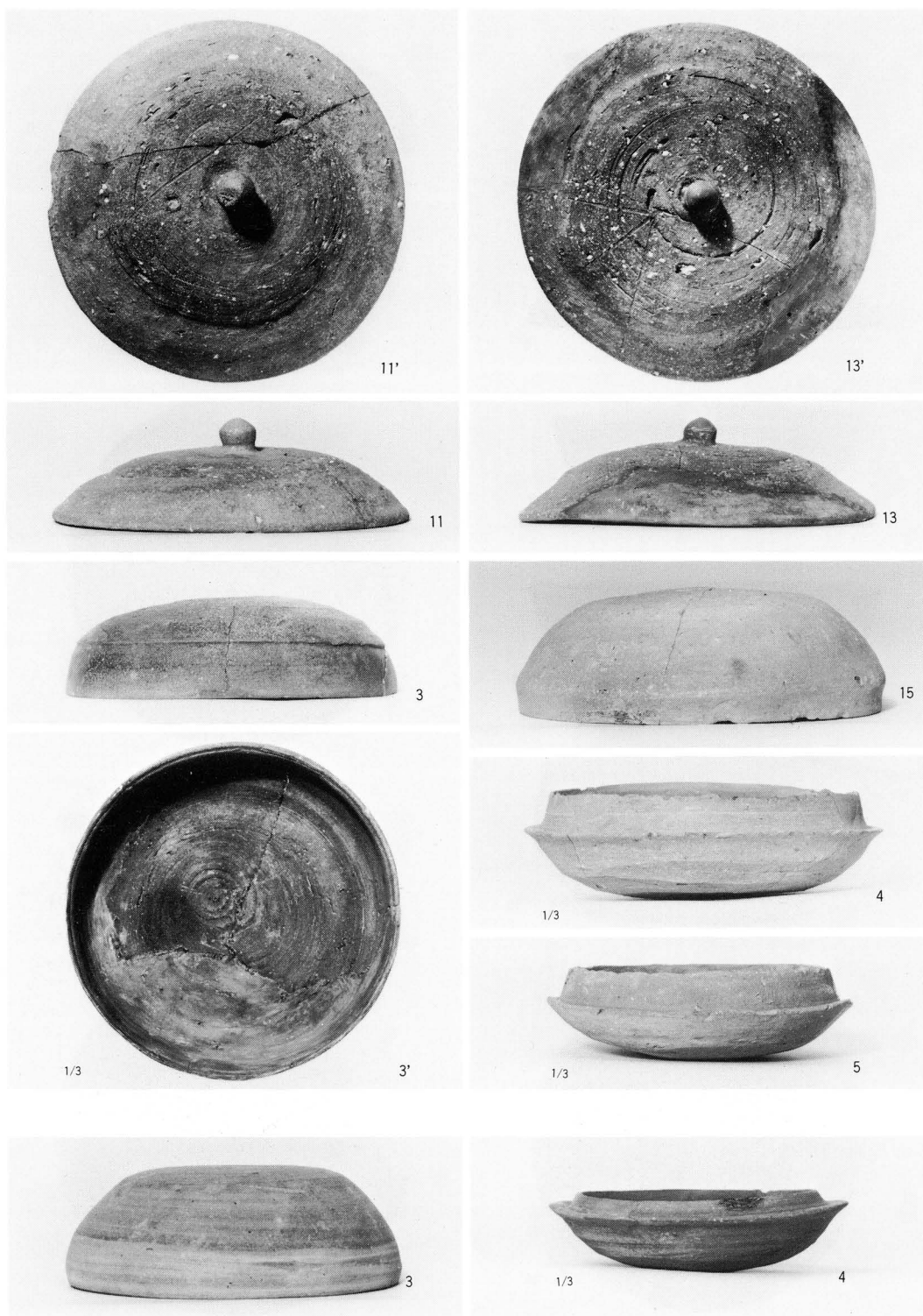
土師器には皿・羽釜がある。中に径約6cmの鉄製の輪をはさんで大小の皿4枚を上下に重ねた重ね皿(1)は東西溝の東端で出土したもの。大皿は口径10.8cm, 器高1.7cm。上に重なる中皿は口径7.9~8.0cm, 器高1.0~1.2cm。3枚の中皿はいずれも灯火器として使用されている。一括投棄された意味,あるいは用途については不明。大皿(2~4)は口径9.8~10.8(平均10.2)cm, 器高1.8~2.0cm。口縁部のヨコナデ調整は外面下端に及ぶ。大皿(5)は口径10.8cm, 器高2.1cm。ヨコナデ調整は口縁部上端に限られる。形態・法量・調整手法ともにSD6130出土の中皿(7~9)に近似する。中皿(7)は口径8.4cm, 器高2.0cm。底部外周に径0.2cmの孔一対をあける(焼成前)。灯火器として使用されており, 2個の孔もその用途と何らかの関係をもつものか。中皿(6・8~10)は口径8.3~9.2(平均8.8cm)cm, 器高1.6~2.0cm。口縁部のヨコナデ調整は外面下端まで。小皿(17~20)は口径6.5~6.9(平均6.7)cm, 器高1.2~1.4cm。ヨコナデの範囲は17・18・20は口縁部下端まで, 19は上端に限られている。底部が上方へ突出する形態の皿にも大小の法量をもつものがある。大皿(21)は口径16.0cm, 器高2.9cm。底部内面ナデ, 口縁部内外面ヨコナデ調整で, 底部外面には成形時の指頭圧痕を残す。中皿(11)口径9.2cm, 器高2.1cm。小皿(12~15)は口径7.4~7.8(平均7.6)cm, 器高1.5~1.6cm。口縁部のヨコナデ調整はいずれも外面上端までに限られ, ヨコナデ調整の及ばない口縁部との間に明瞭な段を残す例がみられる(12~14)。羽釜(23・24)は口径20.0cmと18.0cm。菅原の「大和B₁型」である。体部内面上半部には成形時の円形当板痕とハケ目調整痕を残す。羽釜(22)は口径18.6cm。菅原の「大和H₂型」。体部内面上半部に円形当板痕を残す。羽釜(25~27)は口径12.6cm, 14.2cm・17.4cm。菅原の「大和H₃型」。26・27は内面に円形当板痕を残す。型式別の出土個体数は大和B型が12個体, H型が5個体。

瓦質土器には皿, 羽釜, すり鉢, 火鉢, 花盆と深鉢類がある。皿(31)は口径38.0cm, 器高3.3cm。底部は砂底で, 底部内面ナデ調整, 口縁部内外面ヨコナデ調整で仕上げる。羽釜(32)は口径33.0cmの大形品。口縁部外面に凹線2条をめぐらせ。深鉢(33)は口径32.6cm。口縁部外面に2条の突帯をめぐらし, その間に竹管状のものによる2個一対の円形スタンプ文をめぐらす。花盆(28)は平面方形の浅鉢形で, 口縁部内面ナデ調整, 外面はヘラケズリで調整し, 底面隅に高さ1.7mの断面方形の短い脚をつける。

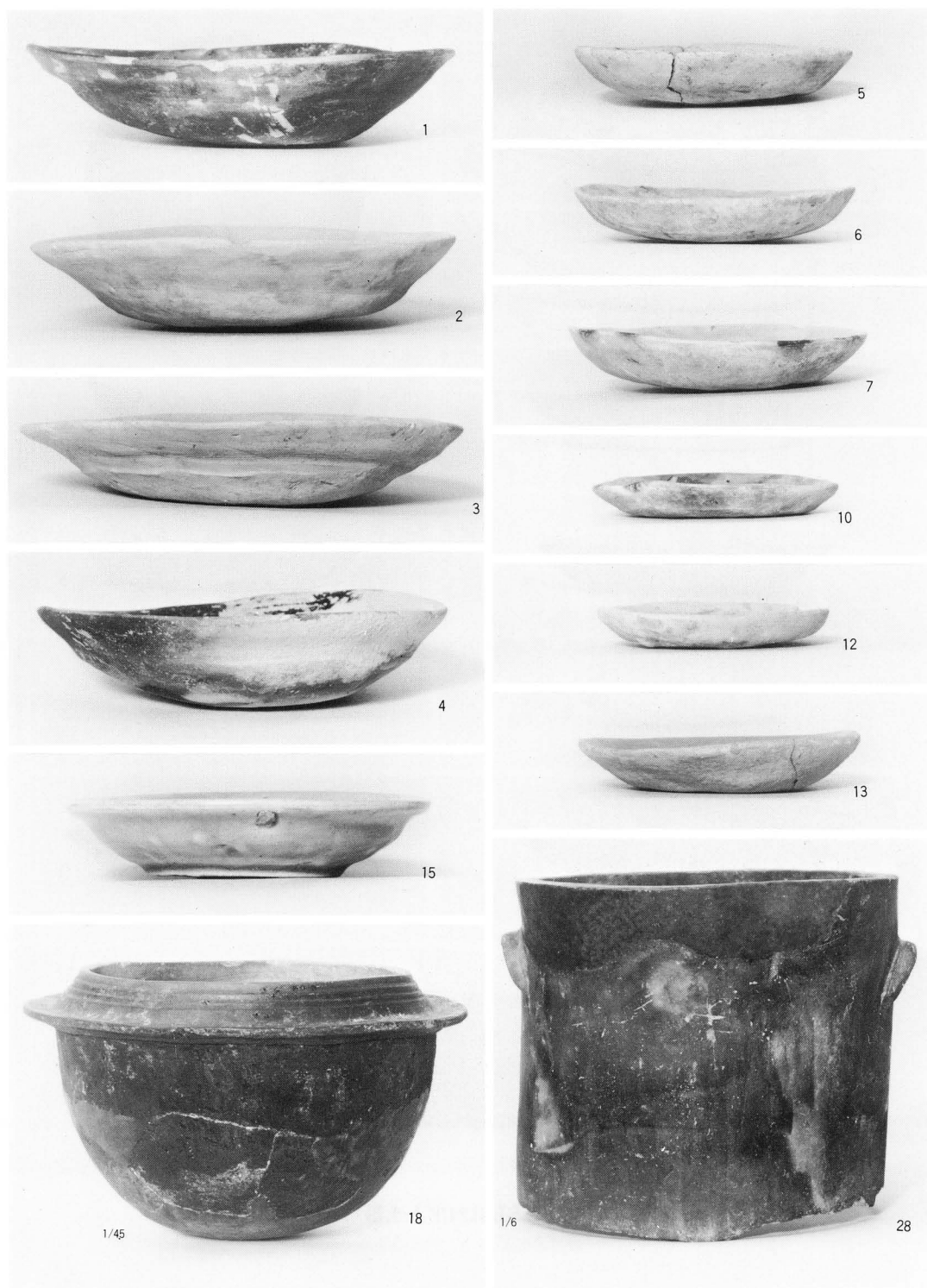
陶磁器類には油杯, 備前焼のすり鉢, 大甕, 丹波焼の扁壺(人形徳利), 壺(船徳利)の他, 産地不明の陶器碗の破片多数がある。油杯(16)は口径10.9cm, 器高2.8cmで, ほぼ完形。口縁部内面中位に断面三角形の突帯をめぐらし, 突帯の1ヵ所に幅2.6cmの半円状の切り欠きをつくる。底部外面~口縁部下半ヘラケズリ調整で, 内面~口縁部外面上端に灰色釉をかけ, 以下は露胎とする。扁壺(29)は器高17.7cm。体部中位に2条の凹線をめぐらし, 型押し別造りの人形(布袋像)を貼付ける。壺(30)は底径19.2cm。底部外面不調整で, 体部下半ヘラケズリ調整。暗赤紫色の素地の体部上半に灰緑色釉をかける。



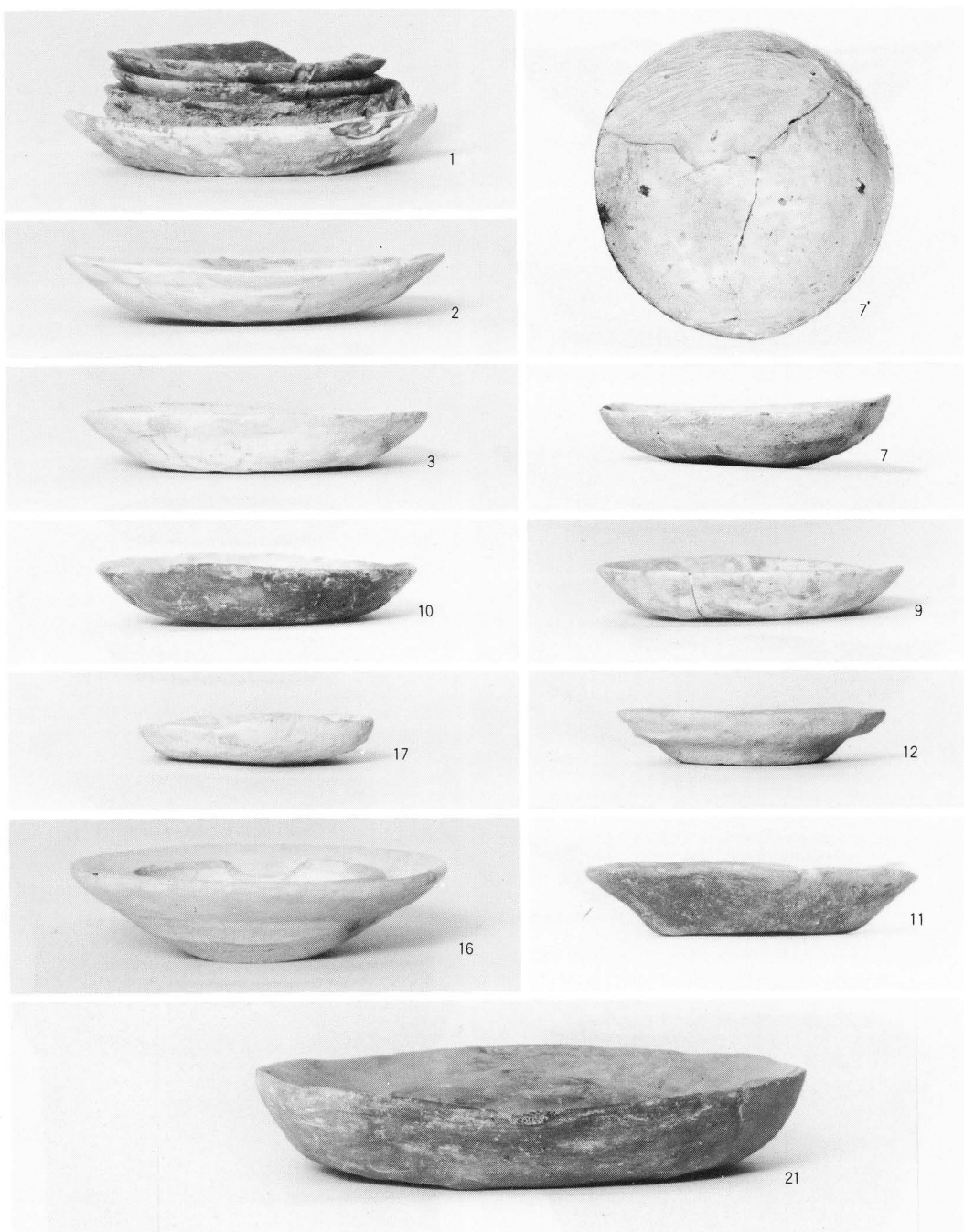
第63図 SD6160出土土器 (1:2)



第64図 SD6191・6214出土土器 (1:2, 1:3)



第65図 SD6130・SX6078出土土器 (1:2~1:6)



第66図 SD6124出土土器(1:2)

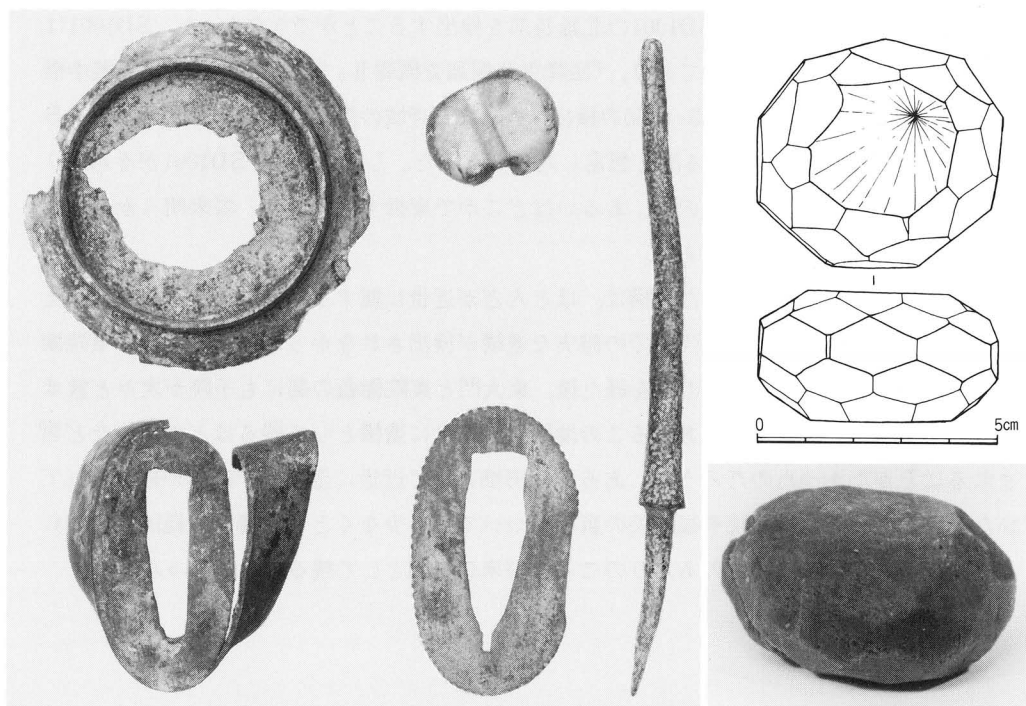
3. 木製品ほか

今回の調査で出土した木製品類は、古墳時代の流路SD6214に埋設していた丸太材や角材のほかは、大半がSE6157・SE6204・SD6130などの中世の遺構に伴うものである。

SD6214からの出土材には製品はないが、カシのような広葉樹の板材もある。

中世にぞくする遺物のうち、SE6157・SE6204は大型曲物を井戸枠としたもので、ともに径約40cmある。これらの曲物は厚さ0.3～0.6cmの薄板を、幅1.5cmの樺皮で縫い合わせたものである。いずれも保存状態が良くないため、何段で井戸枠が構成されていたかは不明である。SD6130からは、曲物、位牌の台、縦板組みの桶、球状木製品とも呼ばれる毬などが出土している。曲物は径20.3cmの底板に側板をつけたものと、径21cmの底板だけのものなどがある。位牌の台は、下幅12.3cm、上幅11cm、厚さ3.8cm、高さ4.2cmの台形状をしており、上面の後部に溝幅0.8cm、深さ1.7cmの杓穴が刳り込まれている。樹種はヒノキ。毬は、長径5.3cm、短径4.8cm、厚さ2.8cmの楕円形をした扁平な球で、心持材を輪切りにしたものを刀子で面を取り、多面体としている。樹種はモチノキらしい。この種の毬は、福山市草戸千軒町遺跡、長岡京市神足遺跡、奈良市薬師寺旧境内、鎌倉市鶴岡八幡宮境内遺跡等から出土しており、いずれも中世遺物とともに出土している。

他にSK6104出土の青色をした偏平なガラス・丸玉・茎を作り出した青銅棒があるが年代は不明。また、ふいご羽口断片や鉄滓片が若干出土しているが、遺構はよくわからない。



第67図 調査地出土青銅製品とガラス玉・SD6130出土の毬とその実測図